

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第二2:12~17「キリストのかおり」

[12-13]「私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いてくださいましたが、兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがなく、そこの人々に別れを告げて、マケドニヤへ向かいました」

パウロは神のみこころによって変更した計画に従って、まずアジャ州の北にある港町トロアスに行く。彼はここで、先にコリントへ派遣しておいたテトスに会い、その報告を聞く予定だった。しかし、彼はまだ到着しておらず、それでパウロは主が伝道のためにトロアスで門を開いてくださったにもかかわらず、そこにとどまらないでエーゲ海を渡ってマケドニヤへ向かった。それほど彼はコリント教会のことを心配していたことがわかる。その後どうなったかは→Ⅱコリント7:5~6 パウロはそこでテトスに会い、コリント人たちが悔い改めているという良い知らせを聞いた。彼の心は明るくなり、それが次節以下の文に反映されている。

[14]「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます」

パウロはここでローマ軍が戦争に勝利した時の凱進行進のことを思い浮かべて書いていると思われる。その行列には、敵からの戦利品が運ばれ、捕虜となった者たちの一団が歩み、次に豎琴を手にした楽士たち、次に芳しい香りを放つ香炉を手にした祭司たち、そして最後に戦車に乗った将軍が群衆の歓呼の声に迎えられて登場する。パウロはここで自分たちクリスチャンのことを、かつては神に敵対していたが、神の恵みによって捕らえられた捕虜であり、神はそのような私たちを通して至る所でキリストを知る知識のかおりを放つ者としてくださったと言う。つまりクリスチャンを通して人々はキリストを知るのである。

[15-16]「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいどれでしょう」

このかおりは非常にはっきりと二通りの反応を呼び起こす。①この尊いキリストの福音を受け入れず、退ける人たちにとっては死とさばきに至らせるものとなる。②それを受け入れる人にとっては救いと永遠のいのちに至らせるものとなる。パウロはこのような務めが非常に大事なものであることを痛感していたので、それにふさわしい者はいったいどれでしょうと叫ぶのである。自分こそふさわしいと思う者は→10:18を見よ。しかし、また3:5では「私たちの資格は神からのものです」とある。私たちも神によって選ばれ、救われ、神の証人とされている者であることを自覚し、謙遜な思いをもってこの務めに励まなければならない。

[17]「私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです」

コリント教会には神のことばに混ぜ物をし、耳ざわりの良いように変えてしまう者たちが潜入していたようである。しかし、神のことばである福音には何ものも付け加えてはならず、また差し引いてもならない。→ガラテヤ1:8~9

しかし、パウロおよびその同労者たちはそのような者ではない。彼らは真心から、神によって、神の御前でキリストにあって語るのである。

私たちが福音を語るときにはこのパウロのように、ただ真っすぐに福音を語れるように努め、キリストのかおりを放っていくことが大切である。